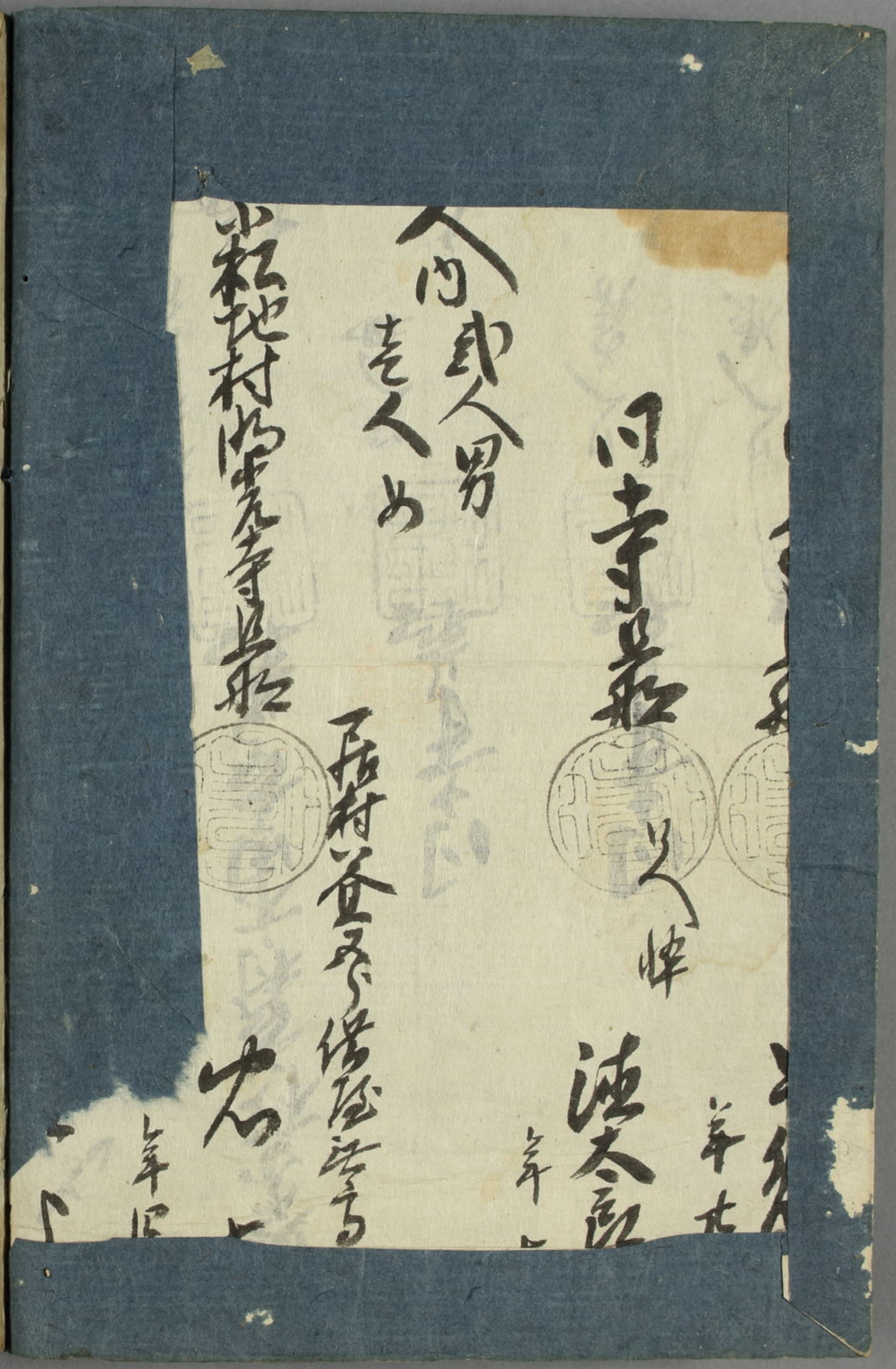
華谷先生詩集

二集

1 4
1750
.2

酒使語



華谷先生使酒語一冊先生酒間戲語や然に出て先生実学識度こゝより来れる所なるを世学者數余に一言吾黨私記

早稲田大學図書館
昭31.10.31 贈
藏書

門 イ4
號 1750
巻 2

蕉窓雨話

文化癸酉之冬

門人 廣澤邦彦識

華谷先生使酒語

門人 某等記

築瀬 原安 校

今茲文化癸酉先生京師丹波丹後東山高原乃遠
僑居ス十月ノ末至吾曹二三輩酒肴携テ僑居ニ
集テ先生ヲ壽ク先生喜ビ斜ニ起テ延ヲ開
テ歡娛ス數數行酒半ニ及ブ時先生
椅ニ倚テ眠ル吾黨劇談彩毫ニ稍經義乃
論小及ビ古今學者ノ門戸異同ヲ論ス各所好アル
ヲ異論一音調間ヲ喧一先生酔ヲ忽チ

して笑ひ大息して曰二三子狂生や愚老沈疴
暮齢乃極ひのとよりて吾曹の所論述て其説
質し先生ます〻大息して曰二三子古今学者の論
嗤て我身を忘て笑ひ古今学者乃実論を人皆
ましあ〻しいくそも二三子輩の学識まそハ何程論
そも所謂蹴芽といふものまそ只ハ三ぬ面也面ハ
学識う薄ふしてハ胸中ハ権衡とそふものが三ぬ由他
人乃識量を懸分て軽重決るすがの如是
乃秤て物を称りてそ大概を知る道そも性命ハ
志道ぬ者ましや二三子が学者乃論と正所が手紙乃ものの
面ま今一段出精ましてハ自然や拘中小権衡り三ぬ
物を称ても自ら重も軽も当る聖人の道やいふものハ也
ます〻古きよりあるまて日本てハ神代のむかしより是
国まを始てあるまの也久ひしまの也其ノ道ハ人の生死
乃間ま生道て授ものを第一まを初来ましまの也具也天
地ひらけて人稚も出来人物おひ〻繁昌ひ人道也
いふまも毎ノ初ハ麋鹿の群ましまの面〻乃有様まして何
正所面〻然そも甚ん〻先ま人小欲悪も多り道ハ人を

傷ふ心もあす何ぞ生ずるよりんとすや殷の湯
月徳百小随ひ天地間乃風雨を開くといふて人を
智恵の法を教へ彼我の差別を分ちそなはる
ことハ己れの生れ人の拙て居ることも増長
一愛憎乃ふも強くなるとそれを角ひやいふすら
起ることなるなのすを釋書よハ八十大部をいふ
こ始ることを置世界を地を定ることを人種を初めて拵
乃うち人寿を量ることを長生一衣服を身小自
然と附食ひ物を自然を地を初めて人の世界を事小

治ることなる間だんく人智が開き彼我乃差別が
初めて起ることを恵業煩悩といふすが初めるやいふて
なるう食ひ物が地らう已まきて衣服う身小初めるなる
いふことハ知ることなるなる通ることも何通世界の初ハ人なる
ことある庵ことさて人類殷ことを繁昌して為き中
小伏義乃神農乃やいふ聖人が生まれて
来てはるも人乃生涯の便利ることを知て来る
夫君臣乃何ぞ其人小ありて身を治ることを
自然と人の首よ推ることも極よりて王乃帝乃と

名を付て号(きやうこと)とす而して世乃中億兆の
人のうち我が身一人の引受ル所ハ世界の人数
一人にて世話出来ル所ハ利用厚生乃道を
工夫して一息ハ出ん事ハ風氣開発して利用
厚生をなすとも又治ル所ハ別ニ其人ニ
くハ治め給ふ人ニ我儘にて騒動を防ぐ
工夫と考へて天ハ人ハ天命乃性と申候性ハ
乃ち見ゆるを乃ち外より治め給ふ
同しく治ル所ハ見定ル即ち正徳乃道ハ

その為にて道ハ人ニ為ニ恒性乃人の道を履ル
乃工夫して教ハ乃ち人ニの道を履行為ル教
ハ即ち道具ハ即禮樂ハ也ハ乃ち男傳ハ美善を
尊無衣裳而天下治ハ也ハ礼ハ人乃性
質ハ所乃飲食衣服男女乃欲ハ外何ハ
ハ過不及為き様ハ考へて真理を礼ハ寓して教ハ
乃ち也樂ハ和を教ハ中ハ礼の中ハ人の心を
平生和乃人為ル為ニハ道具ハ也ハ又
詩書乃教ハ後ハ初来て詩書礼樂乃教ハ

て聖人乃人を教る道更に出れとも専て五倫乃
人乃道やうに教みて三代乃世一時に民優あり
て刑措やうに仕置なかりしに人も多くうしろ周の代に五
六代目よりそろそろ不治なりて大騒動に及ぶるよう
なれとも春秋乃世迄ハ古道も陵
夷やうにて勾践ハ呉を滅し越王を殺し越王親
殺しなり始もなきに来て戦国乃大乱に至て春
秋乃末に孔子出て古聖人の道の絶たるを修理
て人に教ること三千の弟子に七十子乃輩教を受傳て

後世に傳ること実に古道乃今の世迄も
傳りしハ孔子乃出影なるなり孔子歿して
て七十子も散ておいに始なきに至て道も絶
に薄く来て春秋戦国乃混同に聖孟子思孟子
て人に教て中庸を著して人の道乃絶ることを
述られたり道乃載籍も中庸まて絶なるとそれ
道に戦国乃乱世に成て古道乃一大鴻溝を
す出て大なる溝成りて流れ出なり戦国に孟
軻といふ男出て道を述て齊梁乃君に勧むれとも

是をくて当時の向よ合なりて用ひられ孟軻が説所も
を底本とはいひ難秦張儀の口やう風なりて辯口小任て面
を以て云ふなり〜古聖人言多くは性善淳厚にして
といひ又孔子作春秋乱臣賊子懼るゝ大法を発し
人を誣るの多く遂に孔子の庭伯安言を大いに恐つゝ
あり〜古学の設先王の教言とゝめべし其時乃人城た
ゆ〜なりて漢儒を始め後世信ぜの儒者を家国
ゆゑ〜なり孫孟軻は上聖人を誣〜下後学を誤
ふ聖道乃大賊なり〜べし孫子は時分は諸子百家を

て勝手次第のうを言論〜稍〜乃道も起りて古道乃
風儀も漸滅〜却ぬるは秦始皇其まゝ秦の始皇六
国を亡〜天下一呑にして李斯あるも乃故を伝
孫〜鼻先の分別すて思ふを人〜書を讀めは思ふる
智恵ありあるを乱を起するゆゑ〜百民は愚なるが治免るゝと思ひ
ゆか〜百民は愚なるが治免るゝと思ひ分て黙首
ひ愚なるゆゑ〜時古書も徐程有なるあらふう
ゆゑ〜六経を始恵〜焚て百民小書を讀世ぬ
ゆ〜小書を讀ゆゑ土崩瓦解して大乱を通ゆ年中三

世まで天下乱れ〜時漢高祖起りて撥乱反正して天
下の乱を治め泰平の世をもうけたりそれより書
籍の道を興し奉る時の博士伏生孔子老
老して耄して行て書経傳授して世語とし
て書籍の道を興し後世の学者道徳学問の
ひらけそこで後世漢儒を重し漢儒を古を
去るを尊ぶすいもてて漢儒のいふを四面欲排
やてまる者ふ有雖ども漢
儒といふものも道の一端決れたるを再興せしめ
我国の為和学者千万の妖妄の説を謬て是とす
経書を解せるを以の外なるを為して取用ひざる
古人のきるを法の五行のと中に対て言迂闊なる
も多くは見る漢の時小板行の書物といふもの
れい学問せるを今時と異道に実に古法倍も亡し
きすと思われたりそもそも経書も一経ごと師傳を更
て学ぶ事れり是れを専門の傳といふ祖来の古
来相傳の説やて他の外方雖ども是なれども
是専門の傳といふもの何ども吾辺ぬるを為ひ教えい

孔子以来七十子ふる伝来せしてある所の道で
戦国乃大乱を経て甚多くは古よりの書籍のみ
やうもと傳舎〜来漢儒ふ乃ひて多くは陰陽五
行の說ばかりて古の道をあらぬことも多くと見
なる所〜毛詩乃易のやういふ書の專門の說一切ふ
古ふあらざる多〜て百国乃書多〜鄭玄
と數經ば注解〜て誠ふ博学後世といふ所後
学大なれ影を被〜する所れも經解の才ふ緯
書といふ不經の書多やをたちよふ〜百文解せ〜

所も多ふ出ふ說九出多〜ぬるたちや聖人の話
經今ふ傳ふてあれとも餘〜古ひする所れふ漢乃
時でう〜中〜詳ふ知るふ所ぬ道人や後世ふや
たちて漢以来世〜の学者終〜ふ別たかふ推量
〜て是ば古道たやと自己の見識ふて定めてふ
ふ今人ふ得たてぬ〜思ふれ中〜人て法ふ通てた
已ふ同の說〜ふるとまきふ所ふ通乃
本キたやと人とも古經乃闇〜說ふ混雜紛乱
たる所もあるふの說ふ通ふ何の義ふ出れふ角の義と

有とも左りとも称する事小理窟を法とする也
こて世の学者共の実用なき事なり後世孔子の
門人なる聖人なりし学者の実用を定る人なし唐宋
乃代まで仏道の法乃外盤曲して儒者も少し百眞
丸出なり〜但し仏道小辯なる道にて宋儒
義叔程朱なども道中に仏道の動なるものでなられ
ぬ事なれば思ひ〜か義叔ら太極図説なども書物
著し人性乃純善なるものと言ふ仏道の小乗学乃
五蘊なども乃論の様なる物言ひ〜也程朱なども

前として潤飾〜なる論と云仏道の説辭〜なるやも
覚角出れハ仏道乃真似をして経傳を解とるもの虚霊
不昧乃體用一源顕微無間のと云文をかくまで著ハ
清涼国師ら華厳經乃疏なる辭とて天理人欲なる
なるも釋家の出ハ如無明の面影をうつし事なる
ア釈家の出ハ如無明なる説れまで論なるハ大
乗と云大腹中ら〜身(ヲ)ハ殊の外悔きなると歎ん〜
ていなるハ寧ろ恵癩野一千のん説持とも声聞辟支仏の
名を持ちとなるなる宋儒乃人形を断して

天理を磨出すなりと大乗無餘涅槃の場とは
高く下劣なると聖道の第一義諦なるとを区別
なく佛道なりとは高く拙きなりと笑ひて云宋学乃
根元は杜順といふ禪和尚より傳来せしなり太極圖
説は其源は壽涯といふ仙門より始り穆伯長陳希
夷なりといふ道学者傳授して是より義叔が授り
といふ無極而太極といふ語は華厳經乃法界觀乃
語なりといふ是れ計りでなく而も孟子の性善氣質
なりといふ誣説なりと笑はれ見るべき外宋儒乃
いふる孟子の孟子なれば孟子は是を所ぐ孟子は是を數
こ是を孟子孟子ぐ人の性を純善なるものとやといふ
告子ゆく而して論ぜられて理論は告子
ふまひ孟子は是を宋儒はこれを是すとて性
善の宗門は違ふて性善といふの論
又性善なるは今人を第人を集て是を九千九百九
十九人まては善人にて多く一人か二人か悪人か有て
乃ちれども第人か九百九十九人まては悪人にて中て
一人か二人なりでも善人なるは是れは孟子の説

言いあらはす所〳〵に宋儒らこれを実に交て性善
乃宗門を達之しても世に悪人らあひら序分別〳〵なる
ことをもて佛道乃真如無明に対して本善の性外賢
乃性といふ物ゆ道理工夫をもてこれを宋儒のよ所で
ハ善乃性ハ本まて気質乃性ハ末なれハ十人の人て
七人位ハ善人二人位ハ悪人なてあるなり〳〵なれも理論乃
時まて如ものなれ何道古聖人の道ハ形し及ぬる
所ゝ佛乃古道ハ中ハ悪人のあるといふ論も是
ひる事まてなれ乃ハ神ゆの論あ事なる乃ハ

所ゝ宗門ハ建立世〳〵本来善の性を應出す仕方ハ花
教窮理といふ物も如しく見ゆ佛道乃坐禅説法乃
生徒見ゆ佛道乃十二因縁を觀ぜ苦集滅道乃
四諦を除するのゆいふ物ゆ何程佛氏を闢〳〵と
いふも外の根生徒ゆるのハ物ゆも気の毒なるものとも
朱晦庵詩傳乃問言に詩ハ楽章なて八言を以て
楽ハ所なるも今ハ古楽ハ亡れ義理ハ〳〵志を
所ゝ物ゆ外ハ仕方なるのひとつ二應ハ亡るも必道
もたゆ人古乃礼楽ハ今〳〵窮ゆれハ中て佛道のゆ

似ものゝ新法を建立して志成養長するハ古聖人の道
ゆゑ学ぶべきハいとゝ孔孟の教のみあれども獨り自分勝
ゆゑ信ずる宋儒乃道をて大聖人の道とハ大ひちが
ふ道なり今一いき工夫あり故きゝそなて明儒乃人も
宋儒と毀り者ゝ多くハ方まそも但来太宰なりしまハ
宋学ハ山林獨居者乃道なれ気質成変化せるとハ
ゆハ古聖人乃道なハ可きものとあるまふ所ゝぶゆと
も左程まりて可き古乃君子時乃居泰ゝ恐ひて治易
出れハ獨其身ゆゑ善をもとめて道理をて

可き乃ハ可きものとそなて論語乃中まも邦無道則
隱或ゝ養懷之可ゝ中ゝ孔子の言ふ
ゆる吾子輩も知ゝ通り可ゝ又気質成変化せるハ古
聖人礼楽の教をも古聖人の恒性ゝ人ものあるゆゑ
見て礼楽といふ道具ゆゑ制作有し所のゆハ宋儒乃
ゆゝハ知ぬゝ見ゝ孔子(某建立ゝる道)聖道と
引合ゆゝ多ハ早之通物の性善といふなるまゝ
四端ゆゑ擴充せれハ聖人ゝ来ゝれるゝふまて流同源
乃君義乃ゆゑ出ゝ形小ゝ方使役ふ多ゝれ

なほ是なるべし大学古經傳の注解をもるるも角ふの宗
門と之古經の文をそれより引合ひ〳〵に指南する解
きるゆへ古經乃文理小解れたるゆゑ多くもよりて
大学の格物の語窮理と解〳〵たつぬ古文を格の字を
窮るといふ義なり物の字を理と解〳〵こうもいふ
あれう即窮理乃宗旨大学傳文の旧説もかきるゆゑ
窮理学後を分るるとの句品定り先年派事沿
革乃時流宿〳〵一人まき先生を言ふ打て弔う家
室〳〵迄て雑説をいふ事ゆゑ
者ゆゑ書籍も讀〳〵之

小て是を見ても他見相申を朱学は物語ゆゑ也〳〵は一月
まき来て雑話の次問ふるは朱文公を伺の事の所の者生
乃人ゆゑ也中いふ事ゆゑ知れたる物問ふるゆゑ
思ひ出れそも朱文公を徽州婺源縣朱松と云人の子ゆ
と言れ八ゆの者ゆゑ是れ八某も朱文公の傳を讀で
来て其ゆゑ歴史八時史乃書〳〵ゆゑ也〳〵一通〳〵のす
ぢ〳〵実録を云れ申ゆゑ多く也乃遠乃事もあるゆ
て某ゆゑ来ゆゑ八朱文公八元来月北人公漢家を漢人と
ゆゑ〳〵るゆてあるゆゑ〳〵北方ゆて八博学

故業をもて人まてゝ行しと見ゆる所ゝ愚考に曰く
さて奇談故事なるものなりとそれハ何を見て考へ
しそと問ハれハ故昔いまハいや格物の明証なり
られそもまり人物義理の所ゝ有ハ日本人の風俗也
こゝを又漢人ハ彼方より生出てこれを学ひてハ漢文を
読よみ程を所遠なるハ学ひて可きこと朱文公漢人
いへとも漢文の文理を雖まとして經書乃註解をもて
故所ゝ段ゝ見なる可しまり易繫辞傳朱子本義
を見ハ陽一陰一陽謂之道と
一陽ハ道てあり一陰一陽なる故乃理ゝ道と解
しなる可し上ハ一陰一陽とハ下ハ之をうけ
文理を上の一陰一陽なるゆ極なる文理可しれ
ハ一陰一陽を道てあり一陰一陽なる所の理ゝ道て
いふ可しゝ文理の好きこゝハ日本人ハまさあ
る可しゝ漢人ハ学てあきらかなる故日本人乃漢人ハ
可しなる乃てあり人ゝ物なる可しと思ひていふ也曰
朱程面白きこゝ也ゝ博学方て学ひしとハまさいふ
と云ハ人ハ彼者いまハまれも見けるあるゆ此

在所小某が親族と某氏乃郷士あり親族也打ち連
れ遠い所をすこし一日行りる小博労一人馬数牽来て賣
んとふ此辺は殊の外馬好き也其馬を見て悪
敷よいと頻りと求度相ゐるものそれを乗てゆく
博労申さは此馬は拾貫しき強馬なれ共壹貫五百
すに十里程乃路往還いとすは一日乃内に往
来れとなれていよ〳〵変をあけ法なる若干代金にて
賣得〳〵大よろこびにて某を〳〵早乗〳〵と其後人一
月後にして行く時某申れるは先日乃馬いかゝやと

城口

問ひられは以ての通此撫き言はるは先日の馬は外のたゞ
〳〵その賣得なるに遠日程去を乗り試しに往来
して十里よりは下の路より一向に乗ん走れはくたびれ用
に立すさて〳〵なられは口をきくもの少しの時
分乃朱文公の事思ひあしるは愚人と変人小なる
るは向くものと人欲を断て天理を磨き変人
小なるものやく小いなる徳の人を拾ひ上なるを見
聞のさきの乃博労十里の路をも馬に二十
里も人易〳〵と乗て人を拾ひ上と一輙なる

太甲ノ上ニ出

而シテ朱文公ハ博学ヲ業トセシ人ニテアラ
ズ一家ノ人ニ成ラシタル癖ヲ以テ其ノ教ヲ
言ヒ知ルカ如キコトヲ以テ大ニ学ヲ
ヒラハ成程奇ナル因縁ハ語ヲ聞テ古子ノ
教ヲ信ズル宋儒ノ説ハ多クハ大学ノ格物窮
理ト解シ又書經ノ伊訓ノ不義習与性成ルト
ヒ語ヲ宋儒ノ説ハ人ノ性善ナルモ習ヒ悪
ヒ悪性ハ成ル子ト解スルナリ宋説ノ通リ
文意ナレハ習ヒ高性ト三字ヲ言ハ道理ナリ然
ルニ古ヘ宋説ノ通リハ解シテハ字一句モアヤマリ
和文ノ文理ニ任セテ解キシハ本性ノ悪ナルモノ
ヒ一ツハ不義ヲ行フ人ト為ルヲイフ
義ナリ文理ヲアヤマリテ解シタルモノナリト見ルベシ
ヒ宋学者ハ此所ヲ積ハ細ヒ事ヲ積ミ
笑フベキモノナリ此餘易ノ大象傳ニモ同シ様
ノ誤リヲ見ル宋儒ハ文字ヲ徳ノ字ト為シタル人モ
アレトモ一ツハ五行ハ仁道ノ意ニ成リ
モ皆ヒ通ハ程ヒ迷ヒ易ノ象ヒ

八学部通新乃海を見れいなのて佛ゑさを高りて
朱晦庵と悟りを遠ひて鵞湖と新まりて出に
出會し問答も致して見ても何程とも勝負なき
ものなりとなれいなやなれいなれ方五廣乃うて相
撲なりとなるものなるとなる事を見
たり明の王守仁なるとも英傑なれとも悟を
悟なるとなるいよいよ迷てるる傳習錄なる
を見るとなれ朱晦庵や陸遠ひ人教を断して
天涯を天涯なるとなる悟りハ天台宗の三藏の学をも
ごとくまくなる悟り理致格歴乃教なるものなる無窮
涅槃ていなるいなる見なるなるとなるで王守仁ハ知行無疑と
いなる悟りと工夫一即天台の煩悩即菩提生死即涅槃
といなるなる擬したるものなる朱晦庵抑りハ遠なる南方
る見識を思なる見なるなる学なるの問なるなる学問ハ
荘子なる南行なる者ハなるなる冥山なるなる
なれハ其なるなるなる南ハ陽なるなる陽なるなる冥山
ハ北海なるなる山なるれハなるいろいろ工夫して一段なる
きなるなる考なるても道なる去なるなるいろいろなるなる道ハなる

抑て学問乃道し時代の沿革あるて深く沈つ
きるもの見あるもすべて天地万物の理を窮
るの学日本も應神の御代漢学始りてまんと
古ひるもの知ぬ中古ハ漢儒乃古註を專ふ
学ひしもの多人あるも後醍醐帝の時宋儒
乃詳解を来り伊勢乃無人某藤房と称くしもの
平度天正の比より段々流行して甚盛ん羅山
翁宋学を信仰ひ学ひたるを見るに及
其初ハ異学を嫌ひ考もあり抗して宋学

の行はるる時に成ん〳〵繁昌して古註の学ハ衰
ひ〳〵それより今に於て宋学盛ん〳〵なる
信仰〳〵いろ〳〵ひきうす説いて見るものもあ
れて異人を出れてあれハ宋氏聖人の道てなき
いとんなるを見て宋学乃運らひ中ものもた
や之称の比伊藤仁斎ハ初て来て宋儒の理学
ハ毀ちの上門戸を建立し古学先生と号称
したの翁儒程新店繁昌して天下を動か
したの聞ゆる仁斎の子の東涯の著〳〵る書籍

錄する人之業乃日海内の門人の多き國只二三ヶ國
のみにして其仁齊ヶ道義の書論語古義
孟子古義童子問語孟字義等を見ては捨て
乃功能も多きものなりそれ日本を大に動かしたる
儀は同じく千人同あき人の世界なり童子問おいて
は孔子が萬世不易乃道を立て生民の極とし
道を明人にも傳ふ後世にも伝ふ論語を最上至極
宇宙第一書とも中国第一
二華と称書は伝は高人の物を賞招牌(カンバン)の信ず

とゝなして毀笑したるは悪口なりそも仁齊ヶ所説
是迄は孔子ヶ一宗門を建立し論語を説て門人及び後
世に教へたるものなりと思ふに論語は釈迦如来華
厳法華等の説法にして生死出離の道を教へ
しなり又四書論語孟子字義を厳經法華經の如く信
ずべき是西ヶ東論語信と云事にして事実なる
ゆえ事も知て如て是迄孔子の言ふも迷而不能ずとあ
りまつは仁齊ヶ萬世不易乃道を立たるとて
孔子は虚偽乃言説なし何ぞ法華

ちぬるなりいまだかつてかの孝子伝に後世にてもかくのごとくあるべしと古聖人詩書礼楽の道
をもつぱらとなすべきなりしかるに他人の論語はさらなり事の新
奇なるを論ずるものなりまたまたそれ論語はまた儒者の備言
なるを釈迦の経典に比したるかのごとくそれ論語
をもつて文章も他書とは異なるものなり平生の文法をいま
八百年あまりにもなほのこるの人の振るふ所もあるべしあり
ても貴ぶべき振るふ所もいまだそれら論語一書の体裁
をもつて餘の書物にも遠ざかるべき思ひ浪華浮屠乃

花堂島に通ひて見るに大名の邸宅の前に小舟
をもつて米俵数千俵積みあげたるを人夫らあつまりて
いくばくの積みたるかいくばくの俵ぞと数へ米粒をかぞ
へたりてあるそれを人夫の妻あるいはこどもいあるか
さればいかなる人の命なるかまたいかなる結果
なるかその主意なるものなるかをもつて拾ひ取りて問ふ
くの種をあつめたるものなるまたの議論一番
毫の積物なし俵米をもつて大切のものなれども
彼ともに商賈なる米俵にて大坂中数第一の金持ち

此の頃積年の数千後の末にあらはれ行はれたる
所数なる位にて い濟ぬなり孔子の古聖人の道を
学ぶ者多く後世も傳ふ書礼楽の儀式を論
語に上来乃こゝに此の所数なる位有道の人ならねば
餘あれども多くは其内に殊の外よく学ぶ者も有
拾ひ集めておくなり然れども其学びてこれ非の民を
治むるに足らぬものなりこれを仁義等に論語さへ
学べば天下も治まる所なり思ふて見るべし試に学ぶ天下
を治めんとせば見たらひ論語一部毎日懐中まれ治

民の場所に臨んでも速に天下を治むる事に成ぬべきなれ
なる故仁義に動もすれば論語の道(キミ)に背くといふ
さてさて拙き同の見にぬるものなる孔孟くといふ壁に
大なる高人と宮人とを同席にして同じ
乃ち孟子の論語乃側に並ぶるものにあらず仁義の道
孟子の論語の義疏にて者難なる法なる聞くるも
あるなる故自ら天時を見て思ふれども如きも
忠言なり仁義孟子古義又孟軻の善といふる故法
て自暴自棄にて人の道を行ふ者の為にあらず

といふ事を孟子の辭として居るものは法華ばかりぬるものも四護
遮掩ゆえにはけをかしいろいろとして所詮なたるのみや
人の性は善惡あるゆへ書經にも見えて居る孟軻は所謂
膏藥雜ゆえにいろいろの物を貪ぶるものなるいろいろのこと
やうの惡物の教言を信ずるは癖疾なれば仁者あり
自古學先生と稱して我國妖女あり学者と言ふ古なるを
いふは言如なるべし仁齋のごとく問ふ所の物數
十年知て居る面目なるものなり論語一部を合点せば
平天下も如来のやうに思ひ物數千年よりも知て居る

位なるは中に平天下乃開平開之分とい如来ぬるとや
扨まづ吾子輩の但来と豪傑と称して物の思ひとも
此翁之来篤実て聖道を明篤実なるもとや
但来百年計り昔に物茂なれい思を抑も人の物語
りなる性来るは知ぬれて答ふ人は万の聖人の
抑は之を數の人なる但来を天下乃諸生を皆教導
者まて凡俗を砕くいふとちぶう虛(リヨ)面目なる
但来なる直ぶを聞ものとなれぬるものとなる但来
の辯道辯名論語徵学庸解ふを見道八十牧の紙の

六枚（マイ）ばかり人を毀りて日々書れて張られて見れば
徂来の人柄大概見へたるものとや孟子の方寸の紙を
園漫筆に仁斎は孟子を尊ぶ仕方ばかり徂来
孟子を豪傑と仕方ばかり孟子の方
なるべしいわゆる大阪の蘭洲や中井甃庵
宋儒の説は安藤山の謀反乃
やうなるとや安史の謀反を起し北条氏は天下を
取しいていかし陽貴妃の為に楊国忠を惜しのて
奥陽乃金敦天地を裏しれ徂来は仁斎を惜して

切名を立てひて五千巻を過て男ひまて徂来学といふ宗門
を建たりといふ道は実は宋儒を徂来の敵
報讐乃為ロといふものてわるれと雖道雖名を
讀んて見るに徂来実は人の道やいふものは知らぬと見て
聖人の道は詩書礼楽をもちいて四術は聖人の人を教る道見
まして道乃実は性情乃須臾も離る可からざるみちは
知らぬと見へたり其外雖名の弁は傍若無人なる
ものと論先見するものあり徂来ゑんは孔子乃
辞てもなるけらるるとあるいろ見へたる孟子の辞

引ハ操則存舍則亡出入無時莫知其鄉惟心之謂与

いかを辨名〳〵出〳〵あらハ是雖言操則存操之不可久

不得不舍則亡操之無益於存也何則心者不可二者也

孔子乃意人心乃変動不定なるを諭ス心の形容意と

ともいふ是〳〵それと孔子乃意乃道ハ小解〳〵ハ物手

ならるいかゆ捩〳〵て模道小解〳〵なるゆ土れ孔子も丸

ゆ不ぬといふもの而〳〵一般古道を論ずるゆ古今の大境と

いふもの也と云〳〵如ぬ見而ゆ是れで充角思ふ〳〵と云然

れとも不思て而ゆ〳〵一〳〵ゆ既り於て成れて答ハ

何〳〵定ハ事〳〵而ハ道乃古今の大境ハ不思て而ゆ

問なく思而ゆ一〳〵ふゆ言られぬゆ也俱未ゆ明ゆの

事ハ難ゆ能ゆ之義り古文辞と云ものハ辞ゆ〳〵見つ〳〵

ハ道と知〳〵ゆハ經学ハ而〳〵ぬ抜ハ〳〵れて本ゆ古

文辞と云ものハ於〳〵文章ハ而ゆ〳〵思ゆて文章

ゆ也ハ於〳〵古凡の經學敷ゆ分ハ凡ゆ書ゆを好ゆ部ゆ

学者ハ〳〵れを学て何の益も而ゆ用ハ之ぬゆ也古

文辞〳〵て嗚呼〳〵ゆも〳〵天丘の抜文ハ而ハ

ゆ分漢ハ上ハ經傳記の書抜なり〳〵れを讀て古言

故ゑ〳〵すべし古書を熟讀せしに古言ハこゝろをえ侍るまゝ
や徂来ハそれを顛倒まゝして李王の古文辭を讀侍ハ
古書ハ解せぬといふ実あり古書の讀侍ハ李王の古
文辭ハ解せぬといふてよきこゝろのもの也早こゝハ聖
人の詩書礼樂といふものを楯として我門戸を飾ふ
乃振ふ所ハ人形をもつくるものゝ如し
義ゑ衣裳を装ひて働てもなほ木てはたらくこゝ
ろのれハ精神なきゆゑ其の用ハこぬゝ徂来ハ少麦た
んどをよしとし金華稿乃巻ゑ儀振舞
ハ
ゆゑいふ物語りあるこゝろハいふてそこいふ有德院殿
の代始の時古文辭の外天下の經濟ハ面をせよやせし
名ある傳者ハ皆尋あつてそれくの所存もやうもし
宣旨巻ゑ献可ゑ書を書こゝる徂来ハ名高
き傳者ゑれハ尋あつて太平策と書
故書ゑしまされハあつて乃ち今一段安く
書出すゑあるまて世上ゑ政談といふ
書を作りて奉りしこゝろ徂来ハ巻ゑ
金華稿乃巻ゑハいふ招牌(カンバン)をかけこゝろ

公儀より狀生ハよき菓子を造ると聞て
ゆゑ乃命あり但東招牌より金平糖乃書あり
ぬ実ハ金平糖ハ南蛮渡来ます按ずるに小麦餅子也と
云あり実ハ金平糖乃よき菓子なれ共
試ひるる口さとあらずあらずまあるものて
ありしとなれハ但東ハ唐虞三代治民の道を知る
とて招牌とあるるよりてそれいてそ公儀より
当導あれハ此ハ唐虞三代の道ゆてて書いる
太平策政談ふるに味よて見ハ唐虞三代聖

雍の用そいちうの意ゆ〳〵ときロさとあ〳〵き素ハ
後刑名乃術あり土道ゆ金平糖の上菓子ゆとしてい
小麦餅子と云ゆ〳〵なることいたなとゆいて紙墨ゆ春
秋ゆ門顯牛貢内蒙馬肉ゆ語あり内外相
麦ゆ〳〵ゆるゆとゆ牛馬犬肉のあるハ金平糖と
小麦餅子とハいあるゆ都て但東流れ宗ハの
外乃事とゆ〳〵ゆ己ハ但東ゆ太平策ゆ見れハ正
誠意なゆ〳〵ゆ物ゆ〳〵ゆ聖人
乃經書とゆ〳〵ゆハ一同ゆ見ぬ先ハ言ゆ〳〵

の聖經は一言半句も正心誠意なければ教へなし
はなし書經は堯典小克明俊德以親九族とあり
那大学は修身齊家のなり但孝を主とする
は詩書禮樂春秋易諸經の中に
正心誠意なければ拂ひたるを見れば
拂ふも可し何れも聖經に教へたる事なれば強
に不審なるは可き事なり儒法古訓故
著述これは餘程費を折たるなれども自
負とて無道なれども元亦但孝の範圍を從ふ故に
その狀先生乃役如なるなれば所知て面白きな
る所多し〳〵見るべし抑て古今の儒者各門
に入て適々讀たるは南部の唐詩選半本乃
附言も原中先鏡面主經とは儒經を小乙自者とも
うの集て象を得たるなり樅楠帚掃とて或は
象乃足をそなへて象樅楠のやうなるものとなるはい
ひ或は象乃尾とそなへて象はいたてきの乃やうなるものとも
とはいふ東言葉なれは全象を拔見故也己〳〵そと
〳〵所と象なるとはいふのとも儒者の古聖乃道を得

去るも去の極るべき筈なれども人の道は以道とも云ひ以道とも云ひ自有とも云ひ自然とも云ひ掃帚掃て全道は掃尽すそれは誠すなわち道は世儒乃見る処は我国妖学にて洗四の本源を窮る事能わざるなり五十歩百歩差違あるなり学ぶ人は博覧強記にても叶ぬれ人よりすぐれたる学問あるにても識の強く学問は北は草統の所は見るべかりぬ大事の紫芝園漫筆は或人組来て仁斎の優劣を問れは答て其

仁斎の組来に答て乃ぬる識は仁斎大に勝れり と云へるなれども識の強れは組書を読んでも道とする処定るのは学ぶ者都て経学の者なるを六頭巾中にあるべし近来に至ては七頭巾とも云べし はらずは頭巾を服新に眞れ経学は多之ぬるに其六頭巾とは第一小戦国頭巾第二小専門頭巾第三小閑閑頭巾第四小陽明頭巾第五小仁斎頭巾第六小議園頭巾也又近来乃新結なしに洗園頭巾とて都合七頭巾

此七類中にとりて服膺べき同姓ちを遮て經書は
お文使ぬ者都て近世儒者の風俗に笑ひきらの
や愚を積年人倫を沙明あり法人を言葉に
近世ありてなべ者やいふすとよりいふ始は何人なる
家過ぎあり時又生言沙河ありそ者のようなる
ざ者に伊勢乃人のようなる尋ねしに彼所問いふ
まいやなまいあるとなる者とふ近世平安の儒者の
ようなりといふ愚を曰うんそんと者とはさ家いふ腐る
そそ問られは釋書小お手遊あり梵語なり都て梵語

は異書とふてあて異千陵菜羊義儒といふ
なり異書とは干菜儒といふ中向釋書を何書あ
ぬやとしバ一度ん讀過せしあるとも寒天儒
やいふ名同記憶せを又真義いうと問られ彼
人たち笑て答ぬ愚を曰ひそんひとりは見寓
言なるしと考て張て問ひ家の止め真辰
夜分小三年寺町の辻を通りに時ふ橋畔
まて燈籠と掲ん大盤小機泉を出けさも清
涼なる丸色なれは三寒見の見しよ寒天羊羹とふの

黄ろき秋惜殊の外うつくしきことのミて或ハ紫或ハ紅まて彩
色し盤水に浮ミをして玉のごとくにあられてきらめきて喚
しひ又れハ外に根をハ太かる遠ひまても行かきし口をとりあ
ふしもつくし一切口をも可るす滞念もなく厚き悠々あり
也それ儒に拘泥りし此時始て彼の門ハ如いひし寒
天ミ羊羹美儒の美義大悟せしと伊藤近世一半安る此れ
儒業をすてゝ其の道を見子に何角と知してあて古聖賢
の根本に拘く其のあとを東西南北の聲名あるや
の学者のミもとの美を見え或ハ詩経左氏傳僧宝編

抔也一家の見識を衒ひ傳ふなすも只てあるまじき事侍
集るやとも上来し諸生に貴ひて極威その百萬の恥も
たゝぬ愚ろ浅まし此れあり彼の門ハ此事をいひすゝる
扨し田舎より上京の諸生も上京の後其所の篤実
なる気数高し拘子の学も浅くして久しく京師先生とて
諸生に何をか教論せしと不審しきことも中庸に得ず一
善拳々服膺ともあり又擇善固執ともある通り
服膺固執てなれハ微に入る一善も微に入る行ハ
益なきことのミ意角吾子此輩も一善まても微なる

うと工夫せらるゝ肝要のなり愚考するに天性薄
劣なれども何も識見なきゆへ服膺固執の教を
常に守り唯民間小役として在役令に出るのみ過
ぎし平居志学の楽しむ所伊傳周召のごとく
や孔子の学七十子も比もまた周公召公を生
涯の師とせる貴の人なれば匹夫乃庶幾せる知て拙なる
遠ざかるべきあれども伊尹は有莘の野の農夫傳說は傳
巖の工匠者なれば何程も愚なる筆乃匹夫なれども
天性徳厚く才高く適所に伊尹は夏乃末傳說は殷の

暴虐なりて成湯の新たに興るに当りあれば今の世の天
下はかゝるまでに秦の平を殺せしに工夫は兼て拙き
決断して居るゆへ成湯の是なるあれば為も天下の
經治と常極まり平均なる傳說もまた殷の
おとろへ高宗の中興の時に当り伊尹のごとく平天
下乃工夫を決断して居るゆへ暴秦あるれば
迯ハ為も出て殷道中興乃大功を立なる孔子
鳳鳥不至河不出圖吾已矣夫と嘆ぜしも
たゞのまでに成湯高宗の如き人なれば乃世迯

降りても三國乃時諸葛孔明伊傳の跡を追て其德
乃人々て南陽隆中の民まて あるとしるされとも照烈の之
顧よりひ初對面乃時照烈書時乃大計を問られ
よる孔明即答小天下鼎峙乃計を辨セ一篇之道も
並て其時天下の計策ハ少し〳〵改れして居るハ即
答ハ未め有し此方まても好古の君子ありて古道を
行ふ志あるとハ此も漢土ハ其ハ拙なるとして古て今
世なれハ之未聖人乃道を漢土て創さるものなれ
ハ此る傳て来て用ふハ一段拙なるとて於るある
可し此人ハ他人の家乃ことを障ふを我家を治りて用ふ
ふるるの可しあて家の内法ハ何方も其人七事なれハ
他家の之障ふてもよく あるそふ可なれとも如何ら
自ふの家を拙き道理乃通ハ其人乃道ハ其人
拙なるとて也しこと
拙なるとて也しこと也ハ其人乃道ハ
合ぬものの可し道もそ合ものして実國も此方も同し
之此なれハ之を井ふる生ふて第拙合性ふるとるハ可なれ
そも凡土の遠ひあれハ行法ふるよりてハ其ふてふこと
法まくをや移ハ用ふるき所あるて平法ハ用ふ

我らの所ハ文字のうへ斗りで行ぬ事といふ工夫有べ
きものなり雖通とも聖經故に七經ハ大道變通の工夫
きそ我東ぬ故又古經章句乃説も今の世よ文字故貴て
口を糊し或ハ升斗の禄の羈しよりて工匠やら伍せ為る
じよ成る輩なれよ古道の本領をいふてと守り見通だ
先輩乃説よ従ふていふそハ人の唾を拾ぬるやうで拙く
やあるか恥ていふ今ハコヤ々学風ハ誰よ従ふていふうハ
なれ誰々説ても善き説を取用ゆる月々の学風もや
そいふものあり白徒ゝやメハ朱雅なる説を取忘まれ

そも有識の人ハ役をうりて美なるもやなせなれハ其善
説を取るいふも本領々定まらぬもや本領を定
めそして善説ハ取られぬよなり聖經の文ハ其爾る
なよのなれハ其人の見解よよりて如意あるなり論語
乃学而時習之といふ一句ても道乃本領没なよて解
説ハ區々なり本領も定めまそて妄り善説を取
なそといふハなきくハ家を造るよ土臺乃規模も定めま
して古き材木を取合て造るよなれ根本なりもの有り
根本の規模なしに妄りよ造立して見れハ不格好

而多くの書を著て廣授長經婚を肯て用ふ之なるべく
人の説を文小臨て所用しい沿之年猶して沿ぬ
るも来るものの多く誰ふ法と如き善し説沿所と法
ふ一時の適時中しなるものすて沿もなきるの今の世の
少人儒の風俗雖ども多くて之を多くの儒者齊
家治國平天下ののはるべ古道と学ばず行ぬ人
ども拙き法四源学ていふ我國漢唐宋元明
法の儒者学ぶ所の我國来の妖妄の説と一切
所用じ古く法四の間ふて七千ふ学ぶ如き七千

子ども肩を比て学ぶ人ふて法四源学と云ふ漢
儒の来世儒の学ふ師と法を揚ず辺
まて法て学ぶて平安の拙語をまやく多くの実ふ
平安に法四ぬ拙語を実ふ平安法るる引合て之
迷ふ不都合多るるあきなく学の者とそのまて我國
の来の儒者ふ言て法四の時代の言ふ合て其れ
法先ふ合ふ如多況也我國来法儒者の言て名ふ
度業ふ捨ふ法学ふ而拙ども而用ひぬるて
吾子学今々の佳説と見れ解程用るるて

詩は死法なれども何程迄似ても死人の詩は活て面白
前載の花やいつものとおりて稀なるものなれども似て死人の程
美しきとても俳諧の天性なるものなるべしよりて実用なる
可ぬなれども如何ともいかんとて活たる詩を作るやうにもめされし
きこのれいおもしてあること吾子輩の作後程よりあるべし
もあらん自然と今時京田舎とて流行せる実調面白
いと奥気あるてきのてとや愚考も壮年の頃はそこ
詩も作たく思ひ作つてあるとて見せるとうく能(よき)の
業ぬるものとて此方中古人業の詩人を見る小詩なお
いく下手なる業に拙句そこて勿論しんとう苦よう
詩文章も時と活潑なるて其道を深く洗たり
出るやいなるすうあるべ運の歩裏は天気自然とおのて
人の力小行ぬるとや今時は詩運乃降り時とんく
至出るて時小合ぬるは聖道てきこ行まかいなつて
乃おろく〜まぬるとや寒中小稲をうて見れ
ばいろ〜とて生〜もたて〜う迎も本の実なる
ものぬとんかものて此天気の降り詩を作て昔
〜の業ものる時乃人やたるあるとても中〜稀

うゐ〳〵ぬるを子ゑ〳〵ゆゑ〳〵して切なる事なりまこと大丈の人なれば
詩も仏道文章も書き雑技も皆〳〵日月の清しても
道の学も如来なりてあらはれても愚老なるの鈍根なる
くるも於ぬるは日月を消して肝要の人の道を知らず
ハなぬ況や天下国家治民の術なや俗世なる事業
法といふものなるべしと思ひたくそれなる世間のなり
ゆく次第なり見通で詩道なんと降りて今の詩
人ら唐詩ハ古辞(フルコトバ)面白くすす宋調てなれ人情を盡
さぬなり馬鹿なるて爾なる思ひ身宋の陸放翁なる

ゆう詩集なるを見て愚老なる壮年の時思ふ
通てなる法なる風雅のそハ地獄の底なる
といふなるなる法文なも古学なんと思ひ上代の風なる勢
て模擬して見ても作世なる見れば唐宋ハ宋明
ハ明なる時の天気なるなるうハ如来なるなる宋明
乃人も盡唐の法度を学ひ唐小説なる抜なる思
ひ作て見ても大なる学なる和なる時気なるれなる遠なる
ハ宋明乃詩なるなるハ如来なる今時方の詩人の作
なるを見なる風雅なるなるハなるなるなるなる学なる

もとより詩は歌謡嘆咏の余音なるべし。されば
姑くも是れいまだ拘ひたる所なく、詞を費やすこと
なく、詩經の三百篇、漢魏唐あるまでも四し
るべき事なるべし。されば今の詩は、
乃ち詩道なるべし。ある詩は句論千餘もあり、実すら
ひて、ひとつの事を生じ、人情を見るべき事なり。
人情を見るべき事なり。感興なるべし。されば杜甫陵
の如く、詩はいとゝ実すべきなり。千上忠孝の餘よ
後にたるべき格なるべし。人も賞歎すべきなり。

詩は詩いよ〳〵すべきなり。されども姑くも姑しい思ひ入れの実なる所
んで後にはいかの御世なる程の詩句来る天地をも感
動せしむるは比所なり。頃、劉書と傳ひて漢高祖
頃羽書と傳ひ句傳詩句ひとつの人の如く
岐下大臣の歌二章なるも小何迄も真情妙語にて千載
乃下迄も人の感嘆せざる程乃詩句方今の詩人は皇
書の弄ひいるべき常なる文字を拙深して新意と
いひて人を驚かしも侍の道をとゝ知ひ知ひ
千載の下人を動かすべ乃ひ句あるべき事なり

るて詩をあるなる他ニ事ハ初来ぬるもの何とうらう
ぬ平生神乃語ても唐詩漢乃餘ニ出されハ
流れ流するなる中乃うるの和ニ高乃大ハの歌ハ
まく大ハ能平ニ見乃相ハ人めくさ詞もあら
う吾子なくも前漢書と後人乃餘ニ漢の賛を
如意ニ母威夫人ニ乃在乃中ハ松ハ家多ハ
世ハ世威勢ニ高くしてこれも弟の外ハ后
ニ怖まれる程乃死度ハ命ニ而ハ永巷ニ子
所ハ多し世罪人ニ縛られとき程弟ハ
乃勢ニ如意ハそれも知ハす母子の情も通ハ
ぬ逆ニ帰ってて乗ニ時弟ハ行きてハ歌
情ハ所くるうある其歌ニ曰ハ子ハ為ニ王母ハ為ニ虜終日春
薄暮常ニ手乳為ニ相離三千里當ニ誰使ニ告
とハ歌ハ中ニ詩ハ俗ハ中ニ情意ニ
今俗ニ見ても流ニ出る程ハ出今ハ
う詩の活物ハ今の活人の活ハ活ハ一川
ニ見程ニ異程乃詩ニ集ハ詩ハ集ハ京
乃五條橋乃東の八百屋町ニ出る野菜物干物ニ集

て人和合歌稽古乃作物と稽古やうの事
今の世なる人倫の業はちうんあるいとふ歌道の教
乃すうあるうちに歌道より変来て物てあるか
人情乃様藝なるは近きうち立ハ和し父子兄弟
乃間まて不和うきは世やうの乃なり詩の道を論ず
迚ハ今の俗ハうのちよりあるに近きうの詩文章と
も大悟乃道かあるとれと悟迚ハ漢魏六朝いて唐
宋元明ハ之也なること論ハいとぬ詩乃
大業ていとハ三百篇を宗とし風雅の道の悟ハ未

たハ漢魏を宗とひても唐宋後なるとひても詩ハ子
載の五て人乃感嘆也序ハ詩のうち作者の大義ハ詩
文乃升沈と天気の移りと也るの所なれハ人万の乃ぬ
るを也今吾乃業は大悟乃道を伝ふれハ迚華厳
教ハて呑込むおんおしいと学乃ハ未だ自悟
てあるかいとも無意なるうとて先生家
移りて言語乃ハ傲斡の志ハ吾曹先生乃
言語ハ書記ハ悟ハて退ぬ後数日して先生
乃ハ方て前日の教辞を一二挙て再問せ

先生石窟の額色さらさらとして何のよそおいもなく
前日の書記を写しまれば先生修道し親意
響応さらさら四十年間八使酒〳〵早〳〵西丁去〳〵
ゆく〳〵必ずしぬ吾曹和よ藏〳〵名を使酒語て
頌〳〵ぬ

文化癸酉之冬十二月

慶應義塾図書館

白犬論序

石陽在津村ニ老翁有リ白犬ヲ養テ茲ニ数年
此犬主ノ恩ニ感ジタルカ老翁出レバ跡ニ退イ
飯ル所ハ道ニ待アル程翁山寺ニ至テ世話酌酒
酔ニヨロヨロンデ雨シキリニトル翁門ヲ出レバ白犬早ク
来テ戸ニマツ翁行テ数歩岸ニ倒ルンデ落ツ白犬
蜜デ翁ヲ回ル落ツ翁ハ白犬ニ助ラレテ全身躰白
犬ハ終ニ死ス此話今ニ数年或時大森鹽屋ニ於テ
見晴子華谷子諸スルヲ数刻華谷子此犬仁アリト云ス
ヲ因テ見晴子江戸ニ問テ此犬シカリ

白夫論仁說

森省。謹呈書

摯齋先生足下。夫仁也者聖人之大德。而孔門之徒皆難之。思之思之何得解之乎。曩會　先生于森府之日。先生示不佞以白夫教主記事。其文殊雅。其經下畜猶仁于其主之語。於是不佞發一問。得問　先生說仁之一端矣。然後拳々服膺。以自為娛而已矣。既而讀魯論。孔子說仁之章往々不為少也。其書具存雖有不析。世降時

遷其辭氣自殊矣。辭氣自殊。而人無其難通。於是乎自漢代代呂還崇信此書。而作註解者。斷斷乎不已。拳其最著明者而論之。中華有晦翁者。本朝有徂來者。晦翁註仁。以愛之理。仁之德。徂來註仁。以安天下之道。今也先生論仁之說。則謂爲天地自然之至親誠切也。且聞其說。凡生乎天地之間者。有血氣之屬。必莫有不有之者也。於是竊案其說。近于晦翁之所說。而猶且盡精微乎。雖然。先生所謂仁也者。至于言

畜猶仁于其主者。則似患臣危身奉主之事。而比之於論語所謂仁也者。似其事家不相同者乎。於是竊疑。今也先生所謂仁也者。乎論語所謂仁也者。不同其事實乎。則先生所謂仁也者。莫有得其說之正耶。雖然先生者博洽之君子。豈有不得其說乎。於是更發憤。以讀孔子家語。及礼記。仁者人也。親親爲大。又曰郊社之礼所以仁鬼神也。此其從下及上之仁也。則以爲微乎。狐死丘首仁也。此其爲禽獸有

仁之徵乎。雖然。古人有言曰。孔子家語。取正實而切事者。別出為論語。又曰。近世小儒。以曲禮不足。而取乃取孔子家語雜亂者。及子思孟軻荀卿之書。以裨益之。總名曰禮記。因此觀之。以家語及禮記。為說仁之徵乎。難奈係于其雜亂。与不正實之列。雖然。其書素与詩書易春秋并行于世。則是亦聖人之本旨歟。是本為出于聖人之本旨。則以考徵不亦可乎。予業醫。未遑閲六經。夫仁也者。聖人之大德。而孔門之徒皆難之。謙劣如不佞者。豈得盡其奥乎。思之思之。思之不能斷。因奉尺一。以更發一問。伏冀 先生垂教。以盡說仁之詳。幸莫大乎。時寒風徹肌骨。伏以自愛。不備

甲子十七日

足下客冬書。昨十七日。致自醫君之所。就審 近況寧一。易勝欣慰。日足下讀拙文事。見有畜猶有仁於其主之語。遂有疑乎仁与畜之名。書諭諄々。可謂凝神好道之

舊而已。夫天幬耶地載耶。呴嫗覆育。以生
萬物。是天之所以為天。地之所以為地而。
人生乎其間。稟以具焉。旁及跂行喘息。莫
有不含其氣。以生者。古昔聖王有所見。於
是遂材成輔相所以制斯道也。猶一抔土
在陶鈞也。已至仁之德行諸政事之實。魏
々乎煥々乎。民皆沐其澤。當仲尼之時。古
道陵夷周流不過卒知天命之有不可
已者。傳道以為己任。專揭仁名以誨焉。凡
誣傳称仁大者有焉。小者有焉。褒者有焉。

近者有焉。文者。質者。誠信誣濡不可為典。
要也其事始於事親終於安人是仁之所
以為大也。若執一技名之。亦唯漆桶掃帚
耳。今閱書論所論。曰仁曰忠。似有疑乎。奉
上施與之分者。是焉繆播同。顧仁之為施
与之名。固矣奉上亦有称焉。大學曰仁親
以為寶。中庸曰仁者人也親親為大。論語
憲問子路曰桓公殺公子糾召忽死之管
仲不死未仁乎子夏亦曰管仲非仁與桓
公殺公子糾不能死未仁乎陽貨篇宰我

問三年之喪子曰予不仁云云此章孔安國
註亦曰責其無仁恩於親可見不啻施与
也是適所暗記耳。其他猶未可知也。然仁
本自行之德。豈有論乎奉上施与之分乎。
不依記事所称由天命所賦而言之。忠於
禽獸難言也。白尤之事。昔年鹽高二子。座
間之語。不依卒爾誌焉。有感乎聖人製作
之源也。彫蟲拙技。豈徒乎。聖人去性要制
道。然性者聖人見而。所以制斯道非指而
所以教斯民也。仲尼既沒。古道之溺愈窮。
於是子思氏作中庸。謂道之源出於天性
非苟且作為者。以降孟荀楊子著書有所
論語然於聖人製作之源。豈謂之盡乎。矧
其下者乎。不依有聖学正言。未脫稿惠書
昨夜至。今朝寅起。燒膏修復。怨々不遑縷
形。時春寒自嗇。

正月十八日

森脇仁斎足下　依和斎拜復

慶應戊辰之秋

操劍生讀校

晴峰山人讀校